

## 第4章 今日的課題・地域課題の取組事例

県内には、今日的課題・地域課題に取り組み、素晴らしい成果をあげている団体や施設が数多く存在します。その中から、取り組む地域課題、活動内容、組織体制、施設の種類、地区などができるだけ多彩になるように、県内18の事例を選定し、平成23年8月～平成23年10月にかけて、実地調査しました。

今日的課題・地域課題は、様々な要因と課題が複雑に絡んでおり、各事例は複数の課題に取り組んでいることが多いのですが、事例の紹介の関係上、第2章の2「地域を取り巻く現状と課題」(P7～)で述べた仮説に従い、便宜的に以下の4つのカテゴリーに分けて順に掲載します。

### 1 地域の<sup>いま</sup>現在をつくるー地域づくり、地域連帯ー

- ① シニア男性の公民館を核とした地域参画活動  
《八戸市立白銀公民館サポーター「男の料理」》 P 3 8
- ② 地域の有志が地域のために有機的に結びつく  
《NPO法人三戸地域資源発掘会議おっほの会》 P 4 0
- ③ 住民主体で施設再生と町の活性化に取り組む  
《OH!! 鰐元気隊／プロジェクトおおわに事業共同組合》 P 4 2
- ④ コミュニケーションとコーディネーション  
《黒石市立上十川公民館》 P 4 4
- ⑤ 防災を軸に斬新な手法で地域をつくる 《弘前市早稲田中央町会》 P 4 6

### 2 地域の未来をつくるー子ども・青少年育成ー

- ⑥ 地域の歴史と文化を次世代につなぐ  
《下北ふるさと活性協議会／NPO法人斗南どんどこ健康村》 P 4 8
- ⑦ 年間を通じた農業体験・食文化体験  
《三戸食農推進協議会「さんのへ農業小学校」》 P 5 0
- ⑧ 科学教育にとどまらない多様な教育支援活動  
《青森県立三沢航空科学館／NPO法人テイクオフみさわ》 P 5 2
- ⑨ 地域の賛同者をつなげ地域ぐるみで子どもを育む  
《十和田NPO子どもセンター・ハピたの》 P 5 4

### 3 地域社会の基盤となる理念－共生と持続可能な社会－

- ⑩ 男女共同参画と子育て支援に取り組む中核施設  
《青森県男女共同参画センター・青森県子ども家庭支援センター アピオあおもり》  
P 5 6
- ⑪ ボランティアでバリアフリーな食事提供活動  
《みんなの応援隊ネットワーク》 P 5 8
- ⑫ 国際交流にとどまらない市民交流事業  
《八戸国際交流協会》 P 6 0
- ⑬ ビオトープ、巨木、地域の自然資源の活用  
《十和田市東公民館》 P 6 2
- ⑭ 持続可能な社会の構築に向け多様な活動を展開  
《NPO法人循環型社会創造ネットワーク（クロス）》 P 6 4

### 4 多様化する課題に多角的に対応－住民生活・住民意識向上－

- ⑮ 鉄道支援を核に多様な団体の地域活動が結びつく  
《津軽鉄道サポーターズクラブ》 P 6 6
- ⑯ 行政との連携で有志がつながり 町の課題に取り組む  
《町づくり応援隊 いいべ！ふかうら》 P 6 8
- ⑰ 市民が交流し学びあう文化観光交流施設  
《ねぶたの家ワ・ラッセ》 P 7 0
- ⑱ 市民の主体的な活動を支援する多目的複合施設  
《八戸ポータルミュージアムはっち》 P 7 2

# シニア男性の公民館を核とした地域参画活動

## ①八戸市立白銀公民館サポーター「男の料理」【八戸市】

### 今日的課題・地域課題

- 地域コミュニティの核となる公民館を住民がサポート。
- シニア世代の地域活動、住民交流。地域の文化、伝統の継承。

### 施設・団体の目的、経緯

白銀公民館は、地域に愛され一体となった公民館として、平成22年に文部科学省の優良公民館表彰を受賞しました。古くから地域コミュニティの核となっている白銀公民館は、現在、館長1名と事務職員3名の4人で運営されています。職員は全員非常勤ですが、地域に対する想いのある方ばかりで、各種講座や事業を積極的に展開しています。また、公民館を拠点とする自主クラブが24団体あり、他にも町会（振興会）や婦人会など多くの方が公民館を拠点に活動し、また公民館に協力しています。

中でも素晴らしい活動を展開しているのが、白銀公民館サポーター「男の料理」です。その名のとおり、白銀公民館をサポートする地域のシニア男性の会です。前身は「白銀公民館サポート」と呼ばれ、約20年前に町内会の主なメンバーを中心に始まりました。しかし、当初はあまり活発な活動はなされていなかったそうです。

転機は、約15年前に、男性の公民館利用率を上げるために公民館が「男のための料理教室」を実施したことです。その時の講座に参加した方が顔見知りになり、その後もできる範囲で地道に公民館活動をサポートしてきました。その後、そのメンバーが定年退職期を迎えたのを機に、公民館を支援する活動が活発になりました。公民館を中心とした地域活動が活発になって、公民館と住民の信頼がさらに深まると、定年を迎えた地域の男性が次々と参加するようになり、団体は大きく飛躍しました。

平成20年に会名を「白銀公民館サポート男の料理」とし、会則を定め組織化しました。委員長1名、副委員長2名ほか幹事や会計、事務局など役員11名で運営され、平成22年8月時点で、会員は62名となっています。会費は無料で、公民館を中心とした地域の事業がある時に、その都度参加費や活動費を徴収して運営しています。

公民館の施設運営に関わる基本的な経費は市が負担していますが、事業費や細かな修繕費は不足しがちです。そこで、「男の料理」メンバーがボランティアで、これまでの社会経験を生かし、各種講座の講師や事業の運営スタッフを務めたり、建物や備品の修繕や環境整備を担い、公民館をサポートしています。



「男の料理」役員の方々と記念撮影

## 特長的な活動・工夫等

「男の料理」は、役員を中心にメンバーが随時公民館に集まり、館長も含めてよく話し合いをしています。退職後は皆対等であるという意識と、自分の持っている知識や技能を公民館や地域のために提供しようという意識から、互いを尊重しながら自由にアイデアや意見を言える雰囲気大切にしています。また、中上館長も気さくに一緒に話し合い、メンバーのアイデアを前例にとらわれず柔軟な姿勢で取り入れ、事業の運営や講座の講師等をメンバーに任せて後押ししています。

メンバーと公民館との強固な信頼関係を物語るのが東日本大震災の際で、災害時の取り決めがなくても、地震後すぐにメンバーは公民館に集まり、職業経験を生かして発電機や食料等を調達し、一時避難所となった公民館の運営にあたったそうです。

社会教育委員が訪問した日は、地区に古くから伝わる「おしまこ踊り」の練習日でした。そろいのTシャツを着用し、約40名が一体になって踊りの練習に励んでいました。この活動は、地域の伝統文化の継承を目的に平成20年度から公民館事業として取り組み、事業が終了した23年度からは振興会（町会の連合体）の事業に移管しましたが、事実上公民館と「男の料理」が運営しています。

「男の料理」と「婦人会」のメンバー、公民館を利用する自主クラブのメンバーなど、70名以上が参加し、8月中旬の発表会では多くの地域住民が集い好評を博しています。



## 今後の展望、課題等

○「男の料理」の存在や「おしまこ踊り」の活動を通して、地域住民の連帯感も高まってきていると感じています。また、「男の料理」の活動を見てきた子どもや若者の世代にも、自分たちも地域で何かをしなくてはという動きが見え、良い影響が出てきています。

○白銀振興会（町会の連合体）や、地元の学校との連携、行政との連携等をもっと強くしたいと考えています。

## 取組のポイント・ヒント

◇「男の料理」メンバーをはじめ、公民館に集う人たちにとって、公民館は居場所であり、仲間や地域との連帯を実感する場であり、生きがいを感じられる場になっています。

◇公民館は、事業を運営する上で地域住民の声をきちんと聞き、アイデアや意見を取り入れています。また、アイデアや意見を出してくれる人に事業運営を任せるため、住民との信頼関係が深まり、公民館の協力者を増やすことにつながっています。

### ○訪問日

平成23年8月9日

### ○訪問委員

樫沢孝子、小鳥孝之、  
岩本ヤヨエ

### ○対応者

中上千壽子白銀公民館  
館長、会田茂「男の料理」  
委員長 ほか役員9名



八戸市立白銀公民館HP <http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/12,70,39,html>

# 地域の有志が地域のために有機的に結びつく

## ②NPO法人三戸地域資源発掘会議おっほの会【三戸町】

### 今日的課題・地域課題

- 地域資源の掘りおこしによる、地域経済の活性化。
- コミュニティカフェを中心とした、住民交流と地域おこし。

### 施設・団体の目的、経緯

平成20年に青森県の事業である、「青い森鉄道利活用アクションパイロット事業」「新幹線開業対策地域連携推進事業」等への参加と協力を行う中で、「三戸を元気にしたい、稼げる町に、子どもたちが誇りに思える町に」という同じ思いを持つ異業種の仲間たちが集まり、平成21年にNPO法人三戸地域資源発掘会議おっほの会は発足しました。

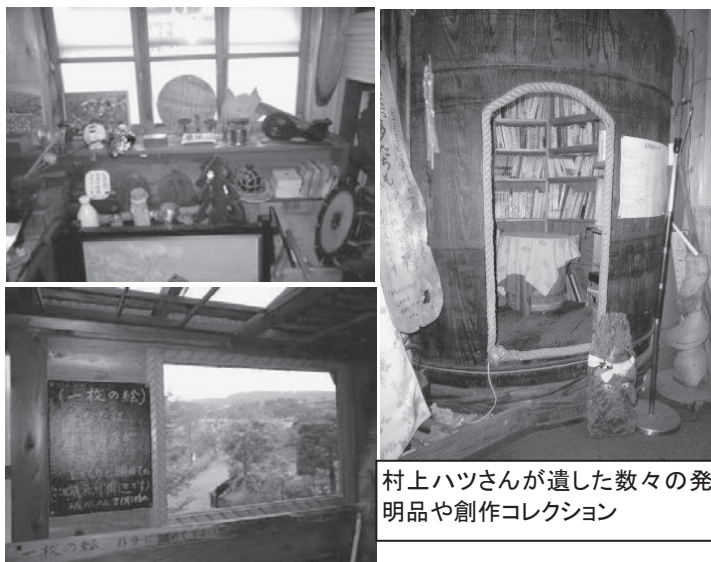
「住民の行政依存から脱皮し、住民自ら着地型観光を企画案内し、元気な三戸町・自ら稼げる町・子どもたちが誇れる町にすること」を目的に、三戸町を中心に青森県の魅力を多くの人に伝え、地域活性化に寄与することを目指して活動しています。

組織は、理事長1人、副理事長2人、他に理事4人（内1人は事務局長兼任）、監査2人で、現在の会員は18人です。活動資金は、会員からの会費（個人年2千円、団体年5千円）や寄付（賛助会員一口千円）と、活動メンバーが各自で負担しながら、地域活動に取り組んでいます。

おっほの会は、新幹線開通に伴いJR東日本から経営分離する在来線の沿線地域として、三戸町が埋没することを危惧した有志が集まっており、地域の民間経営者や福祉関係者、ボランティア関係者などの異業種のメンバーが協力しています。特に中心となっているのが、有限会社「川の驛」と障がい者支援を目的とする「NPO法人どんぐりの家」で、会議等もそこで行っています。「川の驛」は、三戸町の発明家、村上ハツさんが残したコレクションハウス（創作小屋）を友人たちが喫茶店として遺したもので、地域住民が気軽に集える場になっています。



「川の驛」正面入口



村上ハツさんが遺した数々の発明品や創作コレクション

## 特長的な活動・工夫等

おっほの会の主な事業としては、着地型観光（駅からハイキング企画案内）、地方と都市の交流（郷土料理を食する会）等を実施しています。主な連携先は、八戸広域観光協議会、NPO 推進青森会議、青い森鉄道等ですが、青森全体を盛り上げるために、青い森鉄道の沿線地域や津軽地区などの他の団体とも積極的に連携し活動を進めています。

着地型観光として、青い森鉄道の駅からのハイキングを企画し、地域ガイドをしています。また、地方と都市との交流として、三戸郷土料理を食する会を東京で開催しました。他にも、東日本大震災後は陸前高田市で炊き出しの被災地支援活動をしたり、陸前高田市のテニス部の中学生を招き、三戸中学校との合同練習や町の観光をしてもらう企画も実施しました。

各企画は、ホームページや個々のネットワークを使って周知し、集客も順調です。ハイキングなどは事前に実踏し、また活動後は反省会をして次の企画に生かすようにしています。参加者にはリピーターもおり、また賛助会員など寄付をしてくれる人も増えてきており、手ごたえを感じています。

以前三戸高校の生徒20人とワークショップを実施した時に、自分たちが地域のために活動できる場や居場所が欲しいとの意見があり、改めて三戸町に住民活動をする団体がいないことを実感したそうです。生徒たちの思いを形にできるよう、現在どんぐりの家を使用して商品開発に取り組んだり、子育て中の母親や若者、障がい者等、様々な人が集い話せる場を作るため、平成23年10月にどんぐりの家1階にコミュニティカフェ「すてっぷ」をオープンするなど、活動を広げています。

コミュニティカフェオープン時のチラシ

## 今後の展望、課題等

○今後は、地域の子どもたちに、地域の歴史や文化を学ぶ機会を作り、自分たちの生まれた町を誇りに思えるようにしていきたいと考えており、現在、学校や行政にはたらきかけているところです。

○研修会などを開いても参加する人は決まった人で、住民によるまちづくりの裾野がなかなか広がらないとも感じています。

○三戸町には市民団体や住民活動がほとんどないことから、住民主体で行動するきっかけ、突破口になることもおっほの会のねらいの一つです。ですから、三戸町に住民活動が根付いた時には、組織を発展的に解散する方向で考えているそうです。

## 取組のポイント・ヒント

◇新幹線開通を機に、行政主導のまちおこし事業で集まった住民が、自主的に立ち上げたNPO法人です。

◇異業種の有志による組織で、組織の維持発展が目的ではないため、柔軟な姿勢で様々な分野の活動に取り組みます。連携先も広域で多岐にわたっています。

- 訪問日  
平成23年9月17日
- 訪問委員  
秋庭隆貢、浅田豊、  
佐々木秀智
- 対応者  
西国日出子理事長(川の  
驛駅長)、久慈英子副理  
事長(昔っ子の語りべ)

NPO法人おっほの会HP <http://www.ohho-club.jp/index.html>

NPO法人どんぐりの家HP <http://www.donguri-house.jp/index.html>

# 住民主体で施設再生と町の活性化に取り組む

## ③OH!!鰐元気隊／プロジェクトおおわに事業共同組合【大鰐町】

### 今日的課題・地域課題

- 町の財政危機に住民主体で立ち上がり、まちの活性化に取り組む。
- 地域を巻き込む企画と運営。住民の力で公共施設を立て直す。

### 施設・団体の目的、経緯

まちおこしグループ「OH!!鰐元気隊」は、財政難に苦しむ行政に頼るのではなく、町全体で助け合い、志のある人たちと協力して町を元気にしていくことを目的に、平成19年に16人の有志で立ち上げられました。現在隊員は約130人で、会員の年会費千円と、イベント等の収益や県・国の補助金等を得て様々な研修会やまちおこし実践活動（イベント等）に取り組んでいます。元気隊の中心メンバーは約10人で、月1回「大鰐町地域交流センター 鰐 come」で定例会を開き、活動を決定しています。また、子ども組織として「元気隊キッズ」も組織されています。

平成21年11月から「大鰐町地域交流センター 鰐 come」の指定管理者となり、劇的に経営を改善させた「プロジェクトおおわに事業共同組合」は、元気隊から派生した組合です。平成13年の開館以来、町の財政を圧迫してきた鰐 come に指定管理者制度を導入する際、町は元気隊に打診をしました。それまで年間五千万円以上の赤字を出していた施設で、リスクが大きく元気隊として受託することはできないと判断されましたが、有志9人が出資者となって協同組合を結成し、指定管理を引き受けました。町からの指定管理料は0円、その代わり収益は全て指定管理者に任せる、という条件でした。

組合の出資者9人が役員となり、理事長、副理事長、専務理事の3人が自身の本業の傍ら、精力的に関わって経営改善に取り組んだ結果、従業員を一人も解雇することなく施設を黒字に転換することに成功しました。



大鰐町地域交流センター 鰐 come 外観



鰐 come は、住民が交流できる温泉付き多目的施設であり、主な収入は温泉施設の入浴料（町民300円、町民以外500円）、直営の売店・レストランの収益、貸館料です。町直営だった時の無駄を徹底的に洗い出し、従業員の意識改革と売店等の見直しを行ったこと、また「交流センター」の名のとおり、住民が気軽に本当に交流できる施設を目指したことで、地域住民でにぎわう活気ある施設に生まれ変わりました。

また、この取組により、「プロジェクトおおわに事業共同組合」は平成23年度あおもりコミュニティビジネス表彰で最優秀賞を受賞しています。

## 特長的な活動・工夫等

元気隊の普段の活動は、町内清掃やまち歩きガイドのほか、研修会を開催し、町のあり方を勉強したりしています。特筆すべきは元気隊キッズの活動で、地元の学校の畑で育てた野菜や大鰐町の特産品・加工品を、子どもたちが東京の県産品アンテナショップで販売する活動を続けています。この活動は、平成24年3月に、農林水産省の都市と農山漁村のオーライ（往来）の活性化事例を表彰する「オーライ！ニッポン大賞」で審査委員長賞を受賞するなど、高く評価されています。

また、東日本大震災の際は、元気隊として宮古市での炊き出しボランティアの計画を立てたところ、賛同者が次々と現れ、最終的には町をあげた被災地支援活動につながりました。

鰐 come の経営再建は、徹底して無駄な支出を抑え、同時にサービス世界を目指して従業員の意識改革に取り組みました。具体的には、常に運転していたボイラーや、全点灯していた照明を、天気や客の入りに合わせて管理し、光熱費を3分の1に抑えました。また、売店を産直市場メインに変更し、地元の生産者が様々な商品を置くことができるようにし、それを目当てに多くの客も訪れるようになりました。他にも、大量にあった自動販売機の整理や、売店やレストランの利便性向上などに取り組みましたが、最も力を入れたのは従業員の意識改革でした。

指定管理に移行した時、46名のパート職員全員と面談の上再雇用し、核になるパート職員は正規雇用に引き上げ、収益が出た時は全従業員にボーナスを出すことで、仕事への意欲を高めました。また、毎日朝会を開き、挨拶練習や昨日の売り上げ発表を行い、頑張った職員や部署を褒め、公共施設ではあるが経営感覚の必要な接客サービス業であるという意識を高めました。



大鰐町地域交流センター 鰐 come  
内の売店

## 今後の展望、課題等

○元気隊の活動や鰐 come の活動が各種表彰を受賞したり、新聞等で取り上げられることも多くなり、地域での認知度は上がってきています。

○鰐 come の産直市の効果で、半休業中だった地元の菓子屋や農家が活気を取り戻してきています。

○鰐 come については、自分たちの儲けのためにやっていると誤解している人も一部にいますので、理解してもらうように努める必要がある、とのこと。

○行政任せにせず町民の手でやっというところを始めたが、より地域のためになるよう、行政の持つ情報やノウハウとうまくつながり協働していきたいと考えています。

## 取組のポイント・ヒント

◇行政の財政危機が広く報道されたことで、行政に頼らず地域住民の手で地域を活性化しようという機運と住民の連帯感を生みだしました。

◇赤字経営の公共施設に民間の経営手法を導入し、見事に立て直しました。その結果、施設の目的である「町民が集い交流する場」の賑わいにつながり、さらには地域経済の活性化や、新たな雇用の創出にまで波及しています。

### ○訪問日

平成23年10月18日

### ○訪問委員

永澤正己、秋庭隆貢、  
小笠原睦男

### ○対応者

八木橋綱三 プロジェクト  
おおわに事業共同組合専務  
理事、OH!!鰐元気隊代表



大鰐町地域交流センター 鰐 come (わにかむ) HP <http://www.wanicome.com/>



# コミュニケーションとコーディネート

## ④黒石市立上十川公民館【黒石市】

### 今日的課題・地域課題

- 地域の様々な個人・団体を公民館がつなぐことで、深まる住民交流、住民参画。
- 地域ぐるみで子どもたちを育むことで、高まる地域連帯感。

### 施設・団体の目的、経緯

黒石市立上十川公民館は、黒石市上十川地区の人口増加により、平成15年に設置された新しい公民館です。地区内には9町会があり、趣味的な自主クラブのほか、子ども会、老人クラブ、シニアリーダー会、婦人会など約60団体が利用しています。上十川小学校に隣接している立地条件や、建物の新しさ、地区にとって待望の公民館であったこと、などから地域での認知度も利用率も高い公民館です。

黒石市内の公民館は、平成19年4月から全公民館を各地区協議会の指定管理で運営しています。もともと昭和47年頃から各地区の町内会や団体によって地区協議会が組織化され、地区住民による自治が行われてきた風土があったことが、指定管理者制度を混乱なく導入できた理由です。

公民館の運営体制は、黒石市内の全公民館共通で、非常勤の館長が1名、常勤の事務員1名、非常勤の事務員1名の3名です。事実上、常勤と非常勤の事務員の2名がシフトを組んで切り盛りしています。市からの委託料は、人件費と施設の維持管理費で、事業費はありません。ただし、市直営のときに実施していた事業を引き継ぐという協定を結んでいるため、事業は各地区協議会や地域団体の活動費を充てるなど、地区ごとにやりくりして実施しています。上十川公民館では、公民館を拠点とする各団体との連携共催で様々な活動を展開するほか、生命保険会社の助成金や、中山間振興や農村振興などの国の助成金など、積極的に応募して活動資金を確保しています。

市の直営だったときは、一律の予算と職員数で横並びの事業が行われていましたが、指定管理者制度の導入によって、各地区の考え方や職員の力量次第になり、公民館による取組に差が生まれている、とのことでした。

市の社会教育課主導で、年3回の合同会議（各地区協議会長、事務局長、館長、所長）と、月1回の公民館職員連絡会議を開催し、各地区の取組について情報交換をしたり、貴重な研修の場となるよう工夫しています。



黒石市上十川公民館 外観



黒石市上十川公民館内ホール

## 特長的な活動・工夫等

地域内のコミュニケーションを大切にしている公民館職員が、地域内のあらゆる団体や機関をつなげています。また、地域全体で子どもたちの育成に取り組むことを活動の中心に据えることで、一層地域の連帯感を高め、地域コミュニティの活性化を促しています。

具体的には、公民館職員が小学校の職員会議に出席したり、月1回小学校と児童館と公民館の合同職員会議を開催したり、さらには年2回、地区の振興協議会員・小中学校職員・児童館職員・保育園職員・公民館職員による合同会議を開くことで、地域全体で子どもを育む機運が醸成されています。

この関係者や関係機関をつなげる姿勢は教育機関にとどまらず、趣味的なサークルから子ども会、老人クラブ、消防団や福祉関係団体など、地域内のあらゆる団体と公民館はつながっています。公民館主導で何かをするのではなく、地域の人や団体がやりたいこと、やらなければならないことを、公民館がバックアップする姿勢に徹することで、公民館を拠点にさまざまな人の交流や対話が生まれ、新しいアイデアや活動につながっています。

公民館が関わる地域活動は、上十川獅子踊りの保存・継承、夏まつり・新年祝賀会・雪まつり等のイベント、子ども会育成事業（リーダー研修会、ソフトボール大会、宿泊研修会等）、成人教育（敬老会、健康教室、婦人クラブ研修会、一人暮らし安否確認事業等）、中学校との地区合同運動会、町内対抗ソフトボール大会、史跡探訪ハイキング、清掃活動・緑化活動、…と非常に活発です。

そして、充実したホームページと公民館だよりを通して住民に情報発信することで、公民館を中心とした地域コミュニティは、より強く固いものになっています。



毎月1回発行している公民館だより

## 今後の展望、課題等

○地域の子どもに関わる機関の合同会議が最も大きな効果があったとのこと。きちんと情報交換することで、子どもの取り合いをするような行事の重なりがなくなり、お互いに連携協力して地域の子どもを地域で育てようという機運が醸成されました。

○小中学校との連携や各団体との連携はうまくいっているが、高校生や大学生などの青年層の取り込みが今後の課題、とのこと。

## 取組のポイント・ヒント

◇地域のあらゆる団体や機関を公民館職員のコミュニケーション力とコーディネート力によってつなぎ、活発な住民交流と住民参画を促しています。

◇地域の子ども育成を中心に据えることで、地域の連帯感を高め、地域コミュニティの活性化につながっています。

- 訪問日  
平成23年10月5日
- 訪問委員  
永澤正己、秋庭隆貢、小鳥孝之
- 対応者  
村岡剛 上十川公民館常勤事務員、黒石市教育委員会社会教育課長、社会教育係長



# 防災を軸に斬新な手法で地域をつくる

## ⑤弘前市早稲田中央町会【弘前市】

### 今日的課題・地域課題

- 住民のライフスタイルに合わせた柔軟で斬新な地域コミュニティづくり。
- 地域の安全と防災を軸に、住民連帯感と町会の存在意義を高める。

### 施設・団体の目的、経緯

弘前市早稲田地区は、約10年前に分譲を開始した新興住宅地です。当初街灯がなく、夜道の安全面から市に要望したところ、電気代の負担等で町会組織が必要との指摘を受け、平成17年に「早稲田中央町会」を立ち上げることにしました。しかし、町会を立ち上げる際に詳細な住民調査を有志で行った結果、一軒家で約240世帯、アパート住民も入れて千人以上が住む地域ですが、その9割が核家族の共働きか単身世帯であり、町会の事務を担う主力となる専業主婦や退職者がほとんどいないことが判明しました。

そこで、一般的な町会の運営方法では成り立たないと判断し、普段は町会活動が仕事と子育てに忙しい現役世代の生活の負担にならないように徹底する一方、いざという時に各家庭の生活と安全を守る町会と位置付け、柔軟な発想と合理的な方法で運営することにしました。具体的には、①班長制度と回覧板がありません。町会費（月500円）を自動引き落としにして集金業務をなくし、回覧物や配付物はシルバー人材に委託して、市の広報誌に挟んで全戸配布しています。またゴミ集積所の管理・清掃も、月2回シルバー人材に委託しています。

②弘前市の町会連合会には加盟しておらず、子ども会や婦人会、敬老会や防犯協会などの町会に付属する団体組織も一切ありません。子どもの健全育成については、学区内の小中学校のPTA活動を通して取り組んでいます。

③住民のほとんどが仕事を持つため、役員（会長、副会長、理事3名、監事の計6名）会は月1回夜に集まる程度、総会も年に2回、町内大清掃の後にバーベキュー大会を開き、そこで話をすることで済ませています。

④町会の予算も労力も、徹底して住民の安全を守ることに振り分けています。屋外AEDの設置や非常時の防災倉庫の整備、自主防災組織や緊急連絡網の整備、防災をテーマに据えた町会夏祭り等を実施しています。

この町会運営は住民の支持を得ており、一軒家の町会加入率は100%で、ほぼ全戸が家族構成や携帯電話番号、メールアドレスを町会に申告してくれ、有事の際の連絡体制と防災体制が整えられています。東日本大震災発生時にも、すぐに小学校の通学路に10数名が立ち、また一次集合場所にも住民が集まり、町内の特に高齢者世帯や子どもたちだけで留守番をしている可能性の高い家々を見回りしたそうです。普段は特別な近所づきあいをする必要はなく、ただし非常時には町会をあげて住民が助け合うという明確な方針があることで、無理のない住民交流が促され、地域住民間の暗黙の信頼感と連帯感が高まることにつながっています。

## 特長的な活動・工夫等

防災と安全を町会運営の中心に据え、非常時の連絡体制、防災体制がしっかりと整備されています。住民の家族構成や職業までを把握した上で、防災組織や医療救護体制を整えており、町内の診療所や商業施設にも協力を依頼して、災害時に避難する場所や炊き出しをする場所まで想定しています。

また、自治センターの助成金を受けて、平成18年に通報型のAED（心臓突然死を防ぐ自動体外式除細動器）を全国で初めて屋外に2基設置しました。箱を開けると自動的に救急車が来るシステムで、地域の両端にある医療施設の屋外に設置しています。



日本初の屋外設置AED

他にも、防災倉庫を公園に建て、計画的に災害時に必要な物資を購入し貯蔵しています。

そして、平成20年から地域の交流を深め防災意識を高める目的で開催している「防災&夏まつり」は、2万人以上が訪れる最大の事業となっています。対馬町会長が市民活動仲間である庄司さん（当時弘前中央公民館職員）に企画を相談し、お互いが様々なつながりを通して各方面に協力を要請しました。その結果、弘前大学医学部・理工学部、陸上自衛隊、弘前地区消防事務組合、NPO津軽広域救急支援機構、弘前露店商業組合、弘前市中央公民館、弘前市東部公民館などが連携協力する大規模な祭りになりました。地域内の大型商業施設前の公道を通行止めにして、自衛隊や消防の車両や設備の展示と実演や、DMAT（災害緊急時の専門的な訓練を受けた医療チーム）による実演、地震計展示・地震体験コーナー等の防災に関する催しと、宵宮の露店、ねふた運行、お山参詣運行などの伝統文化に関する催しが行われています。

核になる人たちの熱意と行動力によって企画が立ち上がり、明確な目的のもとに人のつながりが広がり、大きな事業として実を結んでいます。



平成22年の夏祭りの様子ー災害対応実演ー

## 今後の展望、課題等

○祭りは多くの来客があり、新興の早稲田地区が広く知られるようになって地域の連帯感も高まっています。また、地域に伝統の祭りがいない子どもたちにとっては大きな刺激の得られる地域のイベントであり、多様な職業や活動を見ることができる良い体験の場になっています。

○震災の影響で平成23年度は開催を中止しましたが、今後も継続して祭りを実施する予定です。

○現役世代の感性で思い切った活動ができているが、今後親世代が退職を迎え、子どもたちが巣立っていく10年後が大事だと思っている、とのこと。

## 取組のポイント・ヒント

◇住民の家族構成やライフスタイルを把握し、これまでのスタイルにこだわらず、柔軟で合理的な町会運営をしています。

◇地縁の希薄な振興住宅地、忙しい現役世代で日中の留守家庭が多いこと、大型商業施設が軒を並べること、などを地域資源と捉え、町会はいざという時の安全を高めるための組織であるとの明確なコンセプトが、結果的に住民の安心感と連帯感を生みだしています。

### ○訪問日

平成23年10月12日

### ○訪問委員

秋庭隆貢、三浦テツ、  
小笠原睦男

### ○対応者

対馬覚 早稲田中央町会  
会長、庄司輝昭 弘前市企画  
部企画課課長補佐（訪問時）